

使い捨て手袋など高品質な衛生用品を安定供給

株式会社エブノ 大阪府泉佐野市

『株式会社エブノ』は、食品加工用の使い捨て手袋等の衛生用品を扱うファブレス企業※として現社長の菊野信江氏が長男の眞弘氏と1995年に設立。人体への悪影響が懸念される物質が食品から検出され、ポリ塩化ビニル（PVC）製の使い捨て手袋に原因があるとして国から使用自粛が勧告される中、日本で初めて食品加工への利用を提案した EBUNO ブランドのニトリルゴム製手袋が評価され知名度が一気に向上。現在は国内の食品業界における使い捨て手袋の最大手として確固たる地位を築くとともに、医療・介護業界でのシェアも増加させている。

コロナ禍において衛生管理の徹底が求められる中、既存取引先への安定供給と新たな需要への的確な対応を通じ、経営基盤の強化と事業拡大に取り組んでいる。

※製品製造のための自社工場を持たないメーカー

会社概要



会社名：株式会社エブノ
所在地：大阪府泉佐野市市場西1-9-8
電話：072-458-0588
設立：1995（平成7）年10月
代表者：代表取締役社長 菊野 信江
資本金：3,000万円
従業員：42名（2021年1月末）
事業内容：衛生用品卸売業
URL：<https://www.ebuno.com/>



（上）本社工場と併設する物流センター



（左）愛保諾（上海）貿易有限公司（海外関連法人）
同社のアジア全域における拠点として、サプライチェーン構築や品質管理の役割を担う。

（愛保諾：「エブノ」の中国語表記）

製品の高い安全性が評価され急成長

株式会社エブノを率いる菊野信江社長は元専業主婦。起業の夢を持つ長男の背中を押し、独自の人脈で仕入先を確保、衛生用品の販売をはじめた。社名の由来は社長の名前を逆から読んだもので、今では「EBUNO ブランド」として浸透している。

業界では後発であった同社は、まず大手企業との取引を足掛かりに販路開拓を図っていく戦略に出た。そして価格競争に巻き込まれないよう自社ブランドの商品開発を進めた。

同社にとっての転機は創業から5年後の2000年、人体への悪影響が懸念される物質が食品から検出され、それまで食品加工に広く使用されてきたPVC製の使い捨て手袋に原因があるとして、国から使用自粛が勧告されたことであった。ここで同社は、日本で初めてニトリルゴム製手袋を食品加工用に提案したところ大手コンビニエンスストアがEBUNOブランドの手袋を採用、知名度が一気に向上した。

現在は食品業界における使い捨て手袋の国内最大手に成長し、医療・介護など他業界におけるシェアも着実に増加している。また販売代理店は約560社と豊富なネットワークを有している。

安定供給・高品質による差別化

同社が創業以来順調に成長できた理由は、安定供給・高品質といった他社との差別化につながる取り組みを着実に実施してきたことにある。

○安定供給

同社の製品はアジア6か国の協力企業で製造されており、発注から納品までに相応の時間を要する。そのため顧客への安定供給を実現するためには、在庫を常に確保しておく必要がある。在庫はキャッシュフローの減少などリスク要因となるが、

同社は安定供給を経営上の最優先事項にとらえ、販売代理店分もあわせ在庫を潤沢に確保している。

また効率化された独自の物流システムが機能しており、午前中の注文については全国6か所の物流拠点から即発送、翌日には到着する。顧客目線での対応が同社の成長の源泉となっているようだ。

○高品質

同社は海外協力企業の製造現場に品質管理担当や社長の長男である菊野眞弘氏が董事長を務める愛保諾（上海）貿易有限公司のスタッフが定期的に訪問し、製品チェックや品質改善指導を行っている。時には生産性向上に向けた技術的なアドバイスも行い、生産性、品質両面において高いレベルを維持できるよう努めている。

また顧客の要望にきめ細かく対応するため新製品開発を積極的に行った結果、商品は1,100アイテム（サイズ・カラー別）にも及んでいる。



同社の主力商品ニトリル NET
（ニトリルゴム製手袋）



コロナ禍における新たな取り組み

新型コロナウイルス感染症は、我が国における衛生管理のあり方に大きな変化を促した。

医療・介護業界では使い捨て手袋の需給が逼迫する中、同社には既存取引先に加え、これまで取引のなかった先からも多くの引き合いが発生した。海外協力企業とは良好な取引関係を構築してきたこともあり、これまでと変わらず製品を供給してくれたが、それでも取引先からの需要は供給を大きく上回り、同社としてはやむを得ず既存取引先への安定供給を最優先し、新規の取引は一時的に謝絶することとなった。

また、供給不足から発生する製品価格上昇は避けられず、製品価格への転嫁は仕方ないことではあるが、同社としては早め早めの発注対応を実施

したことで、価格上昇の抑制や新規取引先への一部製品の供給体制を構築できた。

今回のコロナ禍においても、安定供給など同社の顧客目線のスタンスに一切のブレはなく、経営基盤はより一層強固となったようだ。

地域社会の一員として持続可能な成長を実現

同社は創業以来食品衛生法の規格基準を遵守し、基本的な性能は維持しながらも廃棄時のごみ削減に結び付く薄いタイプの使い捨て手袋などの開発に取り組んできた。そのことが取引先との信頼関係につながり、衛生用品の業界で確固たる地位を築くことができた。同社はこのような持続可能な成長を社会全体で共有すべく、様々な取り組みを展開している。

2013年には大阪府泉佐野市立文化会館のネーミングライツを取得し「エブノ泉の森ホール」と命名、創業の地への思いを示した。また、SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けた活動に寄付する仕組みの私募債を発行するなど、業界を代表する企業として社会に役立つ活動にも率先して取り組んでいる。

さらに特筆すべきは、女性活躍の企業風土が自然と醸成されているところだ。「株式会社エブノ行動計画」には妊娠・出産・子育て中の女性に配慮した職場環境の整備が宣言され、実効性をもって運用されている。ある女性社員が子育て中のエピソードを懐かしそうに語ってくれたが、人にやさしい社風が今の発展の礎にあるようだ。

「ヒト・モノ・カネ」といった経営資源を社会に還元し、自社の持続可能な成長にもつなげていく同社の益々の発展を期待したい。

（秋山利隆、吉村謙一）



エブノ泉の森ホール



中庄物流センター